

エッセイ——不定冠詞をめぐる——

藤田永祐

英語にあってはどうしてあれほど数というものにこだわるのだろうか。人でも動物でも物でもなんでもかんでも、純粹可算名詞のカテゴリーに入るものなら、一つなのか数個なのか沢山のかなどなど、どんな時でも、どんな所でも、どんな折でも必ず明示する、それもしつこく明示する。たとえば文の主語が a boy とか a bird とか she とか it とか 単数を示す名詞ないし代名詞であると、助動詞も複数名詞のときは変えて have ではなく has にする、do もわざわざ es を加えて does とする。動詞も現在時制なら語尾に s を加える。eat なら eats, run なら runs という具合に。

He flies from Tokyo to London. という文をとりあげてみよう。主語が数人でも多数でも、単数でさえなければ“flies”は fly である。“flies”にする主な理由は主語が単数であることを重ねて明示するためだろう。日本語を母国語にする者の感覚からすると、He fly from Tokyo to London. でも、主語が単数なのは紛れようもないのだから、わざわざ“flies”としないでもさしたる不都合は生じないのではないかと思ってしまう。いうまでもなくこれは英語を母国語としない者の勝手な発想で、英語母国語者には He fly from Tokyo to London. は気持ちが悪く、不正確な響きをもつにちがいない。そうすると結局、感覚、メンタリティの問題になってくる。私たち非英語母国語者は、英語を学び始めるに当たって、主語が三人称単数で時制が現在のときは動詞の語尾に s がつくと機械的に棒暗記するのが通例だろう。そしてこの記憶にしたがって英語を運用する。生得の感覚にしたがって運用しているのではない。問題なのは、おそらくどんなに歳月を費やして習得に励もうとも、感覚やメンタリティのレベルにまで血肉化することはきわめて困難だろうということである。

日本語のものの言いでは「鳥が飛んでいる」とか「車が走っている」が普通である。数への言及がない。英語では鳥や車は可算名詞だから a とか a few とか several とか a lot of とか 必ず数を指示する言葉が入る。日本語で「一羽の鳥が飛んでいる」とか「鳥が数羽飛んでいる」とか「たくさんの鳥が飛んでいる」とかいうときは、「一羽の」とか「数羽」とか「たくさんの」に文のポイントがくる。それは、数というものに執拗な関心をもつ英語と異なり、日本語のものの言いは数に言及しないのが通常であって、言及はそれを破るからだ。

「一羽の鳥が飛んでいる」ないし「鳥が一羽飛んでいる」と英語の対応文 “A bird is flying.” を並べると、二つの和文と英文との意味合いは異なっている（二つの和文は同じ内容とみなせるので、以下は「一羽の鳥が飛んでいる」のみをとりあげていく）。英文の “a” は「一羽の」と異なり形容詞ではない。そして数を指定するだけで、その外の意味は一切帯びない。いわば無色透明なのである。それに対し「一羽の」にはいわば色彩がある（a にあてる日本語は「一人の」でも「一匹の」でも「一台の」でも、ほとんどすべてが意味を帯びている）。さらに「一羽の」は “a” に比べて音声的にも表記的にもずっと長く、重い。言葉の響きは意味合いにも影響をおよぼす。こうして「一羽の鳥が飛んでいる」は文脈によっては、意味合いがふくらんで A bird all alone is flying. の意味にもなりうる。一方英文の “A bird is flying.” は製図のように客観的で、文脈によってふくらむことがないのである。

要約すると「一羽の鳥が飛んでいる」が “A bird is flying.” と意味合いが異なる理由は三点に起因する。すなわち「一羽の鳥」は数に言及しない通常の日本語の物言いに反しているから、文のストレスが自ずと「一羽の」にくること。「一羽の」は “a” のように無色透明でないこと。音声的にも表記的にも “a” より長く、重みがあることの三点である。

不定冠詞 a は日本語に置きかえられると「一人の」とか「一頭の」とか「一隻の」とか、いちいちその文脈にあう適切な日本語になる。（適切な日本語とは種類表示詞と呼ばれるもので、難しいものになると、筆を「一管の」とか「一茎の」と数えて、カニの脚を「一肩（かた）の」と呼んだりする）。無色透明の a と違い、置きかえられた日本語はほとんどすべてが意味を帯びている（「一個の」ですら無色ではない。無色なのは「一つの」くらいである）。そこから英文とそれに相当する和文との間におのずと意味合いのずれが生じるのである。

不定冠詞 a をそれに相当する日本語と並べると、文法上はつきり異なる。a は冠詞で文章の構成に欠かせない文法要素であるが、a にあてる日本語は形容詞ないし副詞であることだ。「一羽の鳥が飛んでいる」ないし「鳥が一羽飛んでいる」の場合「一羽の」ないし「一羽」を取っても文章として成りたつが、“A bird is flying.” は“a bird”の“a”を取ると成りたたない。たとえば日本語の通例のもの言い「鳥が飛んでいる」を文字通り機械的に a 抜きに、語尾の複数を示す s も抜きに英語にして“Bird is flying.”とすると、この“bird”は不可算名詞、物質名詞となって、わけのわからぬ文章になる（主語が bird でなく chicken なら「鶏肉が飛んでいる」の意になり、文意はともかく、文法的には成りたつことになるが）。

「一羽の鳥が飛んでいる」の意味合は英語の対応文“A bird is flying.”と異なることを先にみたが、この問題は英語と日本語の対応——単語における、語句における、文章における対応——の問題の一環と捉えることもできる。

1975年に第五回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した『何で英語やるの』の著者中津燎子氏をはじめとして、少なからぬ英語教育者が繰り返しかえし経験し、嘆いてきた一事がある。それは学生たちだけでなく一般の人々に広くいきわたっている謬見——英語の言葉一つひとつは単語でも語句でも、それに対応する日本語があって、それらを覚えれば英語を使えるようになるはずである——を信じていて、それがまちがったコンセプトであることをいくら言っても分かってもらえない、というものである。

日本人は目が黒くて髪も黒い、西欧人は青い目に金髪である（無論これは全般的な真実ではない）。日本語と英語の違いを、比喩を使えば、日本人と西欧人のきわだった容貌のちがいはほどに本質的に違うといつてよいのではないか。英語の単語や語句のなかには、稀に日本語の中に意味合いも使い方もほとんど同じようなものを見いだせるものもあるが、そうした単語や語句ですら、実際は両者のあいだに小さからぬ違いがあるのが通例なのだ。

たとえば間投詞としての“please”は「どうぞ」ないし「どうか」に置きかえられる。とはいえ重さが違うのである。早いはなし「どうぞ、窓を開けてください」は礼にかなった言葉づかいであろう。しかし“Please open the window.”は命令文に近いもの言いになってしまうのだ。

人気テレビ番組の「何でも鑑定団」に登場する鑑定家の中島誠之助のおはこ

のセリフ「いい仕事をしているねー」の「いい仕事」は、今では人の口の端にのぼる普通の表現になっているが、含蓄あるその意味合いは中島個人の豊かな蘊蓄に由来する独特の口調から生まれたものである。このセリフを英語で表現するとしたら、ふだん安易な気持ちで英語に接している人、日本語と英語の発想のちがいが、それに基づく表現の仕方のちがいに地道な関心を払うことも、比較の労をとることもしていないような人は、字義どおりの英語をあてるほかに手立てがないだろう。

“This is a good work.”である。

これでは言葉の表面なぞっているだけで、言葉の真髄は置いてきぼりにされている。

とはいえこの漠然としたセリフは、かりに十人が英語でいう試みをしたら、十人十色になりそうである。

“This is a work of excellent craftsmanship.”

筆者の解釈である。曖昧さのなかに深みと味わいがあるこの種の日本語を英語に移すのはなかなかむずかしい。現段階ではコンピューターも手におえまい。

これは典型的な日本語的表現であって、論理的というより感性的、分析的というより直感的、理性的というより主情的である。そこに日本人のメンタリティや感覚が反映されているといえよう。

ところで、このように記すと一面誤解を招く恐れがなきにしもあらずである。つまり英文というものは、すべからく論理的で分析的で理性的であって、感性的な直感的な主情的な性質に欠けるといふ含意に解されると、それは明らかな過ちをおかすことになる。イギリスの詩歌は世界に冠たる存在であるという一事をひき合いにだすだけでも、そんな主張を論破するのに充分だろう。とはいえ和文を英文に比較すると、一般的に論理的というより感性的、分析的というより直感的、理性的というより主情的であって、そこに日本人のメンタリティが反映されていると記しても、それは的外れな謬見ではあるまい。

優れた文芸作品は媒体となる言語のいかんを問わず、深い含蓄や多義性、豊かな情緒性をおかね備えている。顕著な例はシェークスピアである。この点の考察は大きくわき途にそれていってしまうので、ジョージ・ギッシングの次の言葉を引用するにとどめたい。

イギリスに生まれたのを嬉しく思う最初の理由の一つは、シェークスピアを

母国語で読めることだ。……理解の努力を払わねば生きた魂に触れえない外国語でシェークスピアが語るのを想像するとき、心が寒くなる落胆とわびしい喪失感に襲われる。

(『ヘンリ・ライクロフトの私記』中西信太郎訳 新潮文庫 1970年 145頁)

話を本筋に戻したい。可算名詞が複数の場合、たとえば「数羽の鳥が飛んでいる」とか「鳥がたくさん飛んでいる」を、英語の対応文“Several birds are flying.” “A lot of birds are flying.”と比較すると、「数羽の」とか「たくさん」は“several”や“a lot of”よりも意味合いに重みがある。先に指摘したように、英文では数に関する言葉は習慣的な存在であるのに対し、和文では非習慣的存在だからである。

冠詞 a がそれに相当する日本語に比べて短く、軽いことは先に述べたが、可算名詞の語尾について複数を表す s も、日本語の相当語「たち」(「等(ら)」もあるが、用途は極めて狭い範囲に限られている)に比べると、同じようにずっと短く、容易に使えるのである。たとえば“birds”の“s”と「鳥たち」の「たち」を比べると、音声的にも表記的にもこのことは明らかである。そもそもこの「たち」は、もともと大和言葉になかったもので、英語の複数を示す s にあてて作られたものである。明治の草創期に作られたほかの多くの翻訳語と同様に、原語に比べやや不器用な感をまぬがれない。

私たちが「鳥が飛んでいる」というとき、数の意識を必ずしも伴っていない。私たちは「人がいる」という。一人なのか二、三人なのか大勢なのか判然としない。それはその場の状況なり前後の文脈なりから判断できることもあり、できぬこともある。判然とさせる必要があれば、一人とか多数とかつけ加えればよいので、時と所と機会に関係なく明示せねばならぬ必要などなく、また実際生活上それで一向に困りはしない。日本語のこうしたものの言いに関する私たちの暗黙の了解を言葉にすればそんなところになるだろう。この暗黙の了解、言葉づかいに対するこの考え方がすなわち、日本語母国語者のメンタリティのあらわれなのだ。日本語の言葉づかいの長所は、「鳥が飛んでいる」は一羽の場合も数羽の場合もたくさんの場合もいずれの場合も使えて、また、そのいずれをも意味しうるといふ融通性ないし便利さにあるといえよう。

英語母国語者にあっては、純粹可算名詞のカテゴリーに入るものなら何でもかんでも、それについて話すとき——記すときも、考えるときも——時も場所も機会も関係なく必ず数の意識があるのであり、冠詞や名詞の語尾の s や、英語のもの言いは、その意識のニーズに応じてでき上がっているのである。言いかえると、“a bird” の “a”, “birds” の “s” が音声的にも表記的にも軽々と容易であるのは、英語母国語者の軽々とした数の認識の反映にほかならず、対するに、「一羽の鳥」の「一羽の」、「鳥たち」の「たち」の英語に比較しての長さや重さは、私たちの数の認識の非習慣性の反映にほかならない。そしてまたこのことは、遙かな昔、英語母国語者たちにとって動物や事物の数に関する認識は、彼らの日々の生活にとって必要欠くべからざる要請であったこと、日本語母国語者たちは古来大きく異なる状況・条件のもとに暮らしていて、事情が異なっていたことを物語っているといえよう。

こうして冠詞 a を使う英語母国語者の感覚は、私たちが「一人の」なり「一羽の」なり「一匹の」なりを使う際の感覚とは、実は相当異なっているにちがいないのである。

日本語には冠詞がないから、この感覚がなかなかつかみにくいのだ。この辺の事情を最もよく知る立場にいるのは、英語母国語者で日本語に堪能な人々であろう。英語の文法について、いってみれば親身になって、説明してくれている著書に、マーク・ピーターセンの数冊の解説書がある。『日本人の英語』（岩波新書 2009年 12頁～13頁）の中で著者は次のように記している。

日本の文法書では“a (an)”の「用法と不使用」を論じるとき「名詞に a がつくつかつかないか」あるいは「名詞に a をつけるかつけないか」の問題として取り上げるのが普通である。ところが、これは非現実的で、とても誤解を招く言い方である。ネイティブ・スピーカーにとって、「名詞に a をつける」という表現は無意味である。

英語で話すとき——ものを書くときも、考えるときも——先行して意味のカテゴリーを決めるのは名詞でなく a の有無である。そのカテゴリーに適切な名詞が扱われるのはその次である。もし「つける」で表現すれば、「a に名詞をつける」としかいいようがない。「名詞に a をつける」という考え方は、実際には英語の世界には存在しないからである。……もし食べ

たものとして伝えたいものが、一つの形の決まった、単位性をもつ物ならば、“I ate a...a...a hot dog!”と、aを繰り返しつつ、思いだしながら名詞を探していくことになる。……つまり、aというものは、その有無が一つの論理的プロセスの根幹となるものであって、名詞につくアクセサリーのようなものではないのである。

可算か不可算かの識別、数に関する認識をいつでもどこでも習慣的・反射神経的にする意識は、英語母国語者の論理性・合理性の勝るメンタリティの一つのあらわれとみなすことができるだろう。英語はものごとを精密、客観的にとらえ表現するのにきわめてむいている言語である。英語の精密性、客観性は身近なところではスポーツ用語、パソコン用語に明らかである。

とはいえ、その論理性、合理性はあらゆるケースにすぐれた機能性を発揮するというわけのものでもない。一例をあげてみたい。

分数の数え方であるが日本語では、たとえば五分の一、五分の二、五分の三、五分の四と数え、単複の観念は入らない。英語母国語者の言語感覚は五分の一を単数として、それを基準に五分の二は二倍、五分の三は三倍、五分の四は四倍と把握する。one fifth, two fifths, three fifths, four fifthsという具合に。ものごとすべて可算か否か、単数か複数かを識別するのが自然とする感覚がそこにある。一桁の場合はまだよい、三桁になると、たとえば500分の1はone five-hundredthで、以下500分の2から500分の499まで、498個の分数すべてがsを必要とする複数になる。四桁、五桁となるとさらにわずらわしい観がある。英語の論理性が非合理的になっている一例のように思う。

外国語の習得は母国語とのちがいが大きければ大きいほどむずかしくなる。日本語の発想にないものは、語彙であれ構文であれ文法であれむずかしいのである。Hearing 中心の学習法は従来の学習法の欠点をおぎなう面が多々あるとはいえ、必ずしも旧来の方法に勝るとはいえない面があるように思う。語彙でも文法でも、日本語の発想に縁遠いもの、存在しないものを、感覚を通してマスターするのは不可能に近いのである。そうしたものはまず知的に把握・理解して、しかるのちいろいろな手立てを講じて習熟していくのが効率的であると思われる。そして冠詞は日本語にない要素の代表的なものの一つなのである。

英語の習得の必要性が声高にいわれているが、それは今に始まったことではない。なんのことはない明治維新を迎え日本が世界に門戸を開いたときからいわれてきたことなのだ（「国語は、日本語を廃して英語に変えるべし」と主張した森有礼は初代の文部大臣を務めた当時屈指の教養人の一人であった）。そして今に至るほぼ百五十年のあいだに、画期的と喧伝された学習方法がいくたびとなく世に現れて（今現在も新しいメソッドと称するものがメディアをとおして盛んに宣伝されているが）、時の試練に耐えられず、そのほとんどがあとかたもなく消えていったのである。

日本語と英語のあいだには容易にはのり越えられない壁がある。二つの言語の相違は語彙や構文や文法に、そして音声に、まことに顕著である。こうした相違の拠ってきたる源には、メンタリティや感覚の相違があるといってよい。そしてこのメンタリティや感覚の相違に関しては、辞書や文法書のフィールドの埒外なのである。